HamaMed-Repository
浜松医科大学学術機関リポジトリ
浜松医科大学
Hamamatsu University School of Medicine

Dislocation rate and its risk factors in total hip arthroplasty with concurrent extensive spinal corrective fusion with pelvic fixation for adult spinal deformity

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2024-11-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古橋, 弘基 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/0002000261

論文審査の結果の要旨

人工股関節置換術は良好な成績が報告されているものの合併症の一つに人工関節の脱臼が挙げられる。脱臼を予防するためには、寛骨臼・大腿骨それぞれに適切な角度でインプラントを設置することが重要であるが、過去に申請者らは成人脊柱変形に対する矯正固定術後に人工股関節が脱臼した症例を経験し、矯正固定による脊椎-骨盤の可動性消失が人工股関節置換術の後方脱臼のリスク因子になり得ると考察した。この経験から本研究では脊椎矯正固定術の術前または術後に人工股関節置換術を受けた症例における脱臼率とその危険因子について検討した。

2010 年～2020 年に浜松医科大学医学部附属病院単施設で脊椎手術を行なった症例 23 例 27 股関節を対象とした。関連する因子として、人工股関節置換術の侵入法、使用インプラントの種類、脊椎手術の固定範囲を診療録より調査した。また立位の脊椎・骨盤単純 X 線像から脊椎アライメントと人工関節のカップアライメントを調査した。脱臼発生の有無により脱臼率と危険因子について比較を行なった。本研究は浜松医科大学臨床研究倫理委員会の承認を受けて実施した（承認番号 19-326）。

対象 23 症例のうち女性は 21 例（91%）で、脊椎手術は平均 70 歳、人工股関節置換術は平均 67 歳で施行されていた。先行手術は人工股関節置換術が 12 例、脊椎手術が 11 例であった。脱臼は 22%（6/27 股関節）に認め、全例が人工股関節置換術を先行しており、後に施行した脊椎手術の平均 5 か月後（2-71 か月）に脱臼を生じていた。いずれも人工股関節置換術を後方侵入で行なっており、骨頭径が小さい傾向があり、骨盤傾斜の変化が大きく、人工股関節のカップの前方開角が小さいことが判明した。脱臼は全例、非観血的に整復可能であった。審査委員会では本研究結果により人工股関節置換術後に脊椎矯正固定術を施行する場合は人工股関節に脱臼を生じるリスクが高いことを明らかとし、今後の治療計画の重要な指標となり得ることを高く評価した。

以上により、本論文は博士（医学）の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者　　主査　五島　聡
副査　尾島　俊之　　副査　山内　克哉